露したわけである。戦死を含め残存率五割……

（柴田晃吉・Im昭和二十一年卒・七八号）

終戦。米軍上陸戦車迎撃特攻予定の鹿島灘より復員。母校の西ケ原は焼野原と化していたので、上野図書館仮校舎に復学。翌二十一年春、留年の要望受け入れられずトコロテン式に卒業させられてからちょうど五〇年、半世紀の節目となる。……私は、軍需工場行きとはならず、学校側より助教に任命され、教練や体育の教官補佐、下級生の風紀取締り、災害時の校舎防衛等の任に当たった……

（大森　晋・Po昭和二十一年卒・七九号）

然しこの時代は学生が自由を謳歌することは許されなかった。戦争が激しさを増すにつれて、学園生活の目標である学業の成就・心身の鍛練に加えて、即戦力の養成としての軍事訓練が強化され、学生は滝野川のグラウンドへ通う日が多くなった。その上、軍需品生産工場での勤労奉仕が益々多くなり、学校は休校同然で、勉学の機会はなくなった。

（鈴木哲夫・Ic昭和二十二年卒・八二号）

戦時下という異状づくめの「東京外事専門学校」時代の教育環境の一端が如実に示されている。長い引用になったが、貴重な証言である。

三　東京外国語大学

1　新制大学の発足と体育・保健

一九四九（昭和二十四）年、国立学校設置法により新制大学発足、設置基準に基づき、卒業に必要な四単位の体育

科目（講義・実技各二単位以上）が新しく制度化された。大学体育の目的は「学生の健康を保持し、社会的道徳的精神を涵養し、もって学生生活を豊かならしめ、さらに社会生活を価値あらしめる基礎をつくるにあり」と示されている。

時代は一八〇度転換し、軍事色の一掃、民主主義教育の展開、新体育へ向けて出発することとなる。

2　発足期における体育・保健のカリキュラム　一九四九―一九六〇年

『東京外国語大学学生便覧　昭和二十八年度』によれば、本校における一九五三（昭和二十八）年度の場合、一、二年生を対象に、保健の概念の把握、衛生学全般の基礎知識、環境衛生、疾病予防、栄養学、食品衛生、衛生統計など（保健衛生）、体育の意義、体育運動の適性、世界の体育など（体育理論）の「講義」及び陸上競技、ソフトボール、野球（軟）、庭球（硬・軟）、バドミントン、卓球、籠球、排球、ラ式蹴球、ア式蹴球、漕艇、スケート、スキーなど「実技」が課せられている。

角原虎市

発足当初は、体育専任教官一名、その上、体育施設・用具の不備不足から、とくに実技種目はカリキュラム通りには実施されなかった。漕艇（ボート）は一九五〇（昭和二十五）年度から実技種目として行われ、本校正

課体育の独自種目として、一九六八（昭和四十三）年度に大学紛争で授業が中止されるまで、毎週水・土の午後、ボート部艇庫を拠点として、戸田ボートコースで実施された。

発足当初から本校体育の草分けで、基礎をつくったのは角原虎市教官である。角原教官は正課体育と課外体育の両方を視野に入れて、本校の体育づくりを目指した。実技種目に各運動部部員を学生アシスタント兼リーダーとして活用した。ボート、スキー、スケートなどの実技種目に多くの運動部員が参加して実施された。

スキー実技の指導教官として他教科目の野村泫教官（ドイツ語）、小澤重男教官（モンゴル語）などスキーの達人の教官が加わって実施されるようになったのもこの頃からである。

留学生課程（一九六〇年）が設置され、体育専任として松本邦雄教官が加わり、柔道やスキーなどの実技種目がさらに発展していった。

3　展開・学園紛争期における体育・保健　一九六〇―一九九二年

一九六八（昭和四十三）年三月、角原教官が停年退官し、代わって同年三月、川辺光教官、九月中島光広教官が着任した。先に触れたように、同年の六月頃から、東大や日大の学園紛争の火種が本校にも飛び火し、中野にあった日新学寮の光熱費受益者負担問題から端を発し、全国の大学紛争とともに拡大し、かつて経験のなかった全国規模の大学紛争の嵐の中に巻き込まれた。全学の授業の中止。もっとも学内の様子はわからず、しばらくは戸田ボートコースで正課体育のボートの授業は行っていた。

当時助手は教授会のメンバーでなく、学内事情は何も知らされず、無心で体育授業に没頭するだけであった。ボー

トの受講者から学内がおかしい、荒れているということを聞かされてわかった次第である。

学生による授業中止のストライキ、団交、大学側からのロックアウト、セクト、ゲバ棒、造反有理、教官の吊し上げ、学内は荒れ狂い、さまざまな言葉が氾濫した。当然、体育授業も中止することになった。

大学紛争の激しさの中、学生課長に中島光広教官（一九七〇・七一年度）、川辺光教官（七三年度）が起用された。当時の鐘ヶ江信光学長、石山正三学生部長、坂本是忠学生部長（後に学長）の下で紛争解決・正常化に携わった。

一九七三年には紛争も終息し、正常の授業に戻った。紛争中に体育館が竣工（一九六八年）した。体育科目の非常勤講師の数が増え、ソシアルダンスなどの実技種目を設け、本校の保健体育科目は充実していった。大学紛争が保健体育科目の発展・充実へとつながる意外な結果をもたらした。一九七五（昭和五十）年に阿保雅行教官が着任、七六年に紛争解決に功績をあげた中島光広教官が筑波大学へ転任、後任にミュンヘンオリンピック大会・体操の日本代表選手、本間二三雄教官が着任、本間教官は二年で東京学芸大学へ転任、代わって、七八年に東憲一教官が着任、八八年に学生の臨時増に伴って専任の女性体育教官として初めて、甲斐美和子教官が着任した。一九九二（平成四）年に甲斐美和子教官が辞職、代わって同年に真鍋求教官が着任した。

4　再編期における体育・保健―カリキュラム改革―一九九二年から現在まで

「保健体育科目」は、一九九五（平成七）年、外国語学部の七課程三大講座への改組で大きく変化した。「体育実技」は、「スポーツ・身体運動基礎科目」と改称、新カリキュラム区分名「総合科目」に位置づけられた。従来の二年間通年で二単位から一年間通年で二単位となった。「講義」の「体育理論」と「保健衛生」は廃止され、代わって

「総合科目」の「授業科目」の中で行われることとなった。保健体育所属の四名（川辺・阿保・東・真鍋）は、総合文化講座、人間・環境系列に所属することになった。川辺（スポーツ科学・スポーツ社会学）、阿保（スポーツ科学・スポーツ経営学）、東（スポーツ科学・武道論）、真鍋（スポーツ科学・身体運動制御論）はそれぞれの専門に従って、大学院（前期課程）、講義・演習・卒論演習の三点セット、専修基礎科目（スポーツ科学基礎）、スポーツ・身体運動基礎科目を担当することとなった。

明治以来、体育の代名詞の如く用いられてきた体操科、体錬科、体育科、保健体育科という名称は、本校から公式上消滅した。大学設置基準改定の趣旨に沿って、本校のスポーツ科学、とくにその基礎となる「スポーツ・身体運動基礎科目」のカリキュラム改革（本校の特色、独自性）、自己点検（評価）について、毎週一回の教室会議で検討してきた。

一九九八（平成十）年度からビジョンを具体化することが可能となった。この一端を『東京外国語大学学生便覧平成十年度』及び「平成十年度スポーツ・身体運動基礎科目概略」（受講者のためのガイダンス用）から要約すると、次の如くである。

まず本校のスポーツ科学（カリキュラム）の枠組みとして、「スポーツ・身体運動基礎科目」は単なる実技ではなく、「総合科目」「専修基礎科目（スポーツ科学概論）」「専修専門科目（講義・演習・卒論演習）」「大学院前期課程（身体文化論研究）」につながっていること、次に、「スポーツ・身体運動基礎科目」の第一の目標は、運動・スポーツ文化の実際を通して、本校の学則・第一条に掲げている、「本校は、世界の言語・地域文化・国際的リーダーとしての役割・使命を担う大学」の実現に寄与するところにあること。具体的目標として、**基本目標**　①健康・体力の維持・増進　②社会性・人間性の形成への寄与　③生涯スポーツへの発展、**独自目標**　①リーダーシップの育成　②ス

ポーツを通じた各国・地域文化の理解などを掲げている。

運動種目としては、学生の多様なニーズ、女子学生の増加、本校の特色・独自性、意識調査に基づくデータ、これらを十分に考慮し、定時コースは、体力づくり種目：基礎体力づくり（基礎）、トレーナー育成（応用・発展）、スポーツ種目：テニス・ソフトテニス、バスケットボール、サッカー、バレーボール、バドミントン、卓球、またバスケットボール（応用・発展）、民族舞踊・ダンス種目：民族舞踊、ソシアルダンス、ジャズダンス、武道種目：柔道・護身術、剣道・杖道、また柔道・護身術（応用・発展）を、集中コースとして、学内：弓道、ジャズダンス・エアロビックダンス（八月）、学外：アイススケート（一月）、スキー（二月・基礎）、（三月・応用発展）を設けている。体力測定は受講者全員を対象に、四月授業開始時に行う。本校伝統の対大阪外大戦、学内ボート大会の参加者には加点で評価するなど、さまざまな改革を実施している。

5　体育施設

本校の体育施設は、昔から恵まれなかった。前述の神田火災、関東大震災、第二次世界大戦による校舎焼失、間借り、移転を繰り返してきた。その度毎に、体育は遅れをとった。神田火災で校舎を灰にし、新築の仮校舎で授業を再開した一九一三（大正二）年、体操の授業時数、週三時間は二時間に減らされた。嘱託教師の高橋数良（柔道）、今泉来藏（撃剣）は、その年度から六年間、教師一覧から消えている。教室がないのに体育（体操）どころではなかったのである。かくの如く、体育は移転の度毎に遅れをとってきたことは否定できない。

東京外国語大学となって、西ヶ原キャンパスは曲がりなりにも、体育施設が徐々に整備されはじめた。現在、授業

で使用する運動施設は、課外体育における各運動部活動と共用であるが、三〇〇メートルトラックのある運動場（約九〇〇〇平方メートル）、テニスコート三面、体育館（一五六六平方メートル）、トレーニングセンター、弓道場などである。また学外には、秋田県田沢湖高原に田沢湖高原研修施設が、埼玉県戸田ボートコースには研修合宿所が設置されている。それぞれの施設を拠点に、スキー、山岳（登山）、ボートの授業を行ってきた。なお、課外体育（運動部）については巻末の年表を参照されたい。二〇〇〇年には、本校は府中市の新キャンパスへ移転する。広大な運動施設の建設も計画されている。新しい時代に入る。カリキュラム中心の改革から施設を視野に入れた、大学全体の運動・スポーツ文化の創造、改革が期待されている。